

② 部門の活動 [特色ある業務]

全学教育機構では、それぞれの部門において、大学に中期目標・計画などに従い、特色ある活動を行っています。平成 29 年度の特色ある活動は以下のようになります。

○ 総合教育企画部門

本学では、大学教育再生加速プログラムの支援を受け、卒業時の質保証のモデルづくりを進めている。そのために、教育改革推進委員会、学務部と連携し、平成 29 年度は、以下のような業務を行った。

実施計画	結果と成果 (全学の動き)
<p>H29.4 月に教育 3 ポリシーを公表し、H30.2 月までに各学部の学科・コース等 (カリキュラム) 毎に学修目標を要素分解し、指標を設定する。</p>	<p>大学として、教育 3 ポリシーを公表するとともに「コミットメント・セレモニー」「大学入門ゼミ (必修)」などの自校教育・初年次教育を通じて、学生の本学教育方針の理解度の向上を図った。全学部のシラバスにおいて、それぞれの科目が、教育プログラムの学修目標 (DP) のどの要素をカバーしているのか明記し、カバー率などの分析を行った。指標については、中期目標・計画と連動した指標を設定し、大学の年度計画と合わせて進捗状況の点検を行っている。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>大学の人材養成像を明確にすることにより、社会と大学との間で育成すべき人材像の共有や相互に連携した取組を可能とした。</p> <p>全ての教職員が、どのような教育を行い、どのような人材を輩出するのかを共通理解し、連携して取り組むことを可能とした。</p> <p>ディプロマ・ポリシー (DP) の理解度について新入生調査を行った結果、入学前に DP を知っていた者は 1/5 程度であったが、上記の自校教育・初年次教育等を通じて 2/3 程度が DP の理解度が進んでいることが確認できた。</p>
<p>H30.2 月までに各学部の全学科・コース等 (カリキュラム) において、カリキュラム・マッピング、カリキュラムツリー等を作成し、体系的で組織的な教育体系に改善を図りつつ、DP を踏まえた教育の体系性の検証を行う。</p>	<p>平成 30 年 2 月から 3 月にかけて、授業アンケート結果、学修成果の達成度などのデータを集計・分析し、すべての学部において、学外者も交えたアドバイザーボードによるカリキュラムの点検を実施した。地域社会など学外者の参画を得ることにより客観的な視点を取り入れるようになった。</p> <p>カリキュラム・マッピング、カリキュラムツリー等の作成状況についても各学部に点検を指示した (結果報告は 4 月)。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>カリキュラム・ポリシーに沿ってカリキュラムが展開しているかどうかについて点検を行い、必要な改善を図ることによって、学生には有機的に連結している 3 ポリシーにもとづく教育をより充実させた上で受けってもらうことができるようになった。</p>

	<p>理学部のアドバイザーボードでの点検では、課題となる事項について議論し、アクティブ・ラーニング科目数は適切に配置されており、評価基準を同じ尺度に揃える努力はなされているという評価を得た。</p> <p>学外者による点検を受けることにより、客観的な視点を取り入れ、社会との協働を一層推進することができるようになった。</p>
<p>H29.5月から、学修成果について就職先、教員から意見聴取（直接評価）を開始し、学生の学修成果の社会適合性を点検を行い、H30.1までにFD等を通して、社会のニーズを各プログラム（カリキュラム等）にフィードバックする。</p>	<p>H29.2月、3月に、260人の卒業生修了生や、およそ330社の就職先の企業や50の自治体から本学卒業生のディプロマ・ポリシーの達成度について聴取を行い、今年度、その分析を行い、入学時から各学年、卒業時、卒業後3年後など連続したDP達成度の推移についてまとめることができた。</p> <p>その結果については、全学会議等で情報共有を図るとともに、各学部等のFDで活用した。</p> <p>↓</p> <p>聴取の結果、DP要素を十分身につけている又は概ね身につけていると回答した割合は、課題解決力（78.26%）>職業人としての意欲と倫理観、主体性（68.55%）>専門分野における十分な見識（63.13%）>地域活性化に取り組み貢献する積極性（59.12%）>世界を俯瞰的に理解する能力（57.14%）の順であり、一部のDP要素については課題があることが確認できた。</p> <p>可視化された学修成果を全教員と共有することで、DPを活かした教育の各段階での有効性について各教員が知るところとなり、連携して質の高い教育改善を検討することができた。</p> <p>学生の卒業後の追跡調査の結果を改善にフィードバックすることを可能とした。</p> <p>学修成果を多面的に把握することができるようになった。</p>
<p>H29.4月からキャリア教育により学修動機・意欲を向上させる方策を実施（コミットメントセレモニー・はばたく！茨大生などの開催）する。全学教育機構と学部との会合（全学教育機構各部門会議等）を実施する。</p>	<p>入口から出口まで、DPの達成度を学修達成状況の指標としているため、入学時にDPについて十二分に把握してもらう必要があることから、平成29年4月からディプロマ・ポリシーの説明、解説を行い、入学生に学修目標を理解してもらう為の自校教育・キャリア教育の一環として、「コミットメント・セレモニー」及び「はばたく！茨大生」を開始し、卒業までに求められる学修成果についてあらかじめ見通しを持てるようにすることで学修動機・意欲の向上を図った。</p> <p>特に、アイコン化された5つのディプロマ・ポリシーを掲載した「コミットメントブック」を入学時に新入生に配布するなど、学生への浸透を図った。</p> <p>↓</p>

	<p>これらの自校教育の効果として、ディプロマ・ポリシーについて理解したと1年時の6月に回答した学生は約2/3に達しており、本学の教育プログラムの根幹、学修成果把握の基礎となるDPを多くの学生が把握の上、学修に向かう体制が構築できた。</p>
<p>H29.4月から全学教育機構総合教育企画部門会議などを通して、教育情報のニーズを把握するとともに、H29.9月頃に教育情報のニーズに関するFDミーティングを開催する。</p>	<p>全学教育機構総合教育企画部門会議には、各学部の教育改善担当者が参画しており、平成29年度は合計10回の会議を開催し、授業アンケート項目および実施手法の全学統一、卒業時アンケート項目と手法の全学統一などを行った。</p> <p>また、その議論の過程で、各学部の教育情報ニーズを把握し、全学部にFD情報を提供することができた。</p> <p>↓</p> <p>学生調査の体系化を進めることができた。</p> <p>各学部に総合教育企画部門からFD関連情報を提供できるようになったことから、部門は学修成果等の調査・とりまとめ、現場教員はそれらの情報を用いた改善を行うというような分担を行うことができるようになった。</p> <p>そのため、各教育現場では、これまでデータ集計等に用いていた時間を学生のための教育改善に関する議論に当てることができるようになった。連携しながら組織的に教育を展開できるようになった。</p>
<p>H29.4月から、新教務情報ポータルシステムの運用準備を開始し、年度末に向けて本稼働の最終調整を行い、レーダーチャートなどで学修成果を可視化し、学生へ提供する。システムは、ポートフォリオや学習支援システム等と連動させ、学生の自主的な学修を促進させることを目指す。年度内を通して、他大学調査やセミナー調査を行い検討につなげる。</p>	<p>新教務情報ポータルシステムの運用準備を進め、年度内に旧システムから新システムへのデータ移行も完了した。</p> <p>レーダーチャートなどで学修成果を可視化する機能、振り返りを行う機能を実装した。</p> <p>↓</p> <p>既に各科目がディプロマ・ポリシーのどの部分に対応しているかについては、シラバスに明記することになっていたため、それらのデータをもとに学生は、自分がどのDP要素をどの程度学んだのか、ということ把握することが可能になった。</p> <p>加えて、自らの教育目標に対する達成度についてレビューを行う機能も実装したため、半期ごとに自己点検評価を行うことが可能になった。</p>
<p>H30.3月までに、基盤教育科目「大学入門ゼミ」で選考策定してい</p>	<p>複数の科目で試行導入したルーブリックの知見を活かし農学部で卒業論ルーブリックの先行運用を開始した。</p> <p>理学部では、卒業論ルーブリック導入のために過去5年間の卒業研究</p>

<p>るルーブリックを基に、卒業研究ルーブリックたたき台（全学版）を策定する。</p>	<p>の成績分布について分析を行い、その成果をもとに学部 FD で議論を進め、卒論ルーブリックの導入準備を進めた。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>農学部では、厳密な卒業研究の評価ができるようになった。学生にも成績評価基準が明示されているため、十分な取り組みができていない学生に対して効果的な指導が可能になった。</p>
<p>H29.6 月から成績評価手法に関する研修の準備を開始するとともに、H30.3 月までに、各学部を設置したアドバイザーボード（第 1 回・第 2 回助言評価委員会）等による、質保証システムの点検を行う。</p>	<p>成績評価手法に関する研修内容の検討を行った。</p> <p>すべての学部で学外有識者（高校関係者、海外協定校教員、地元企業社長、他大学同分野部局の部局長、地元自治体関係者、卒業生等）から構成されるアドバイザーボードを置き、2 回もしくは 1 回の会議を開催した。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>すべての学部で具体的な学生調査結果などを示し、客観的資料にもとづく議論を行うことができた。</p> <p>地元企業や自治体、高等教育機関からの実質的な意見を提供いただくことで、改組の実施状況に関する手応えや、具体的な教育改善のヒントが得られ、学生のための地に足が付いた改善を進めることが可能になった。</p>
<p>H29.8 月から、成績の開示にルーブリックの活用の検討を開始するとともに、FD ミーティングにおいて成績評価基準等の明示を行いながら、教員との意見交換を継続していく。 H29.10 から成績の開示にルーブリックの活用を試行的に開始する。年度内を通して、他大学調査やセミナー調査を行い検討につなげる。</p>	<p>全学部で必修科目として展開している「大学入門ゼミ」でルーブリックの使用を開始しているが、複数学部でルーブリックに関する FD を行った。</p> <p>芝浦工業大学や授業改善等に先進的な取り組みを行っている大学の調査を行い、H30.3 月に芝浦工業大学の FD 担当教員によるルーブリックの使い方などを含む授業改善のための FD/SD 研修会を開催し、全参加者（36 名）から満足した、という回答が得られた。また普及事業の一環として、本学が議長を務める「いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム」など、学外者にも開放しており、2 大学から 7 名の教職員が参加し、意見交換も行うことができた。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>アンケートを分析すると、参加した教員は、ルーブリックの活用だけでなく、授業改善の実践的なコツや DP と自分の授業の関連などを把握することができるようになったため、FD に参加した教員を起点に授業改善の輪が広がる取組となった。また、研修会の内容やアンケート結果を含む実施記録を Web サイトに公開し、普及活動にも貢献した。</p>
<p>H29.4 月から、平成 28 年度から継続して検討している各種学生</p>	<p>平成 29 年度中に全学教育機構総合教育企画部門会議において、授業アンケートの項目と実施手順、学生の生活に関する調査、卒業生アンケート、企業アンケート等の全学共通化を図った。</p>

<p>調査（授業アンケート、学生の生活に関する調査、卒業生アンケート、企業アンケート等）の全学共通化（統括実施）に向け、検討事項を具体化していく。</p>	<p>↓</p> <p>学生の学びに関する情報だけでなく、悩み、要望について統一的なフォーマットで情報を得ることができるようになった。</p> <p>多くの学部で、深夜アルバイトを行っている学生の成績不振問題など全学的な課題が次々と判明し、各学部で情報提供をすることができるようになり、学修支援・学生支援の適切性について学生支援部門に情報提供をすることができるようになった。</p>
<p>H29.10月頃までに、各種学生アンケート等で得た、エンロールメントマネジメントに関する情報を各学科・コース等や担任に適切に配信できるよう試行していくとともに、学務系職員を中心にSDを実施する。年度内を通して、他大学調査やセミナー調査を行い検討につなげる。</p>	<p>エンロールメント・マネジメントに関する情報提供を複数の学部で開始した。</p> <p>各学部で学部FDは6回開催し、当部門としては学生調査結果について情報提供した。</p> <p>アドバイザリーボード時には、事務系職員も参画してもらい教育改善のための議論に参画いただくことでSDの一環とした。</p> <p>エンロールメント・マネジメントおよびアセスメントの実践手法については、H30.1月、米国（メイン州立アーガスタ校、H29.5月、米国IR協会年次大会（ワシントンDC））調査を行い、特に直接評価の実践的な知見や教員をその気にさせるFDへのデータ提供方法について現場担当者から最前線の話聞くことができた。</p> <p>↓</p> <p>米国調査の結果にもとづくFDへのアセスメントデータの提供は順次開始しており、単なるデータの提供ではなく、教員のニーズに合わせてピンポイントに提供することで、深い教育改善に関する議論を支援することができるようになった。</p>
<p>H29.5月から学生の学修成果測定方法（直接測定・間接測定）について平成28年度実施内容の分析を行うとともに、測定方法を決定する。平成28年度実施内容を検討しつつ継続実施する。H29.10月から学生にレーダーチャート等でDP修得状況を提示し、一般科目の学修成果を明確に</p>	<p>H29.4月に実施した2年次生以上およそ5,400人を対象とした学生生活実態調査や、H29.6月に実施した入学生およそ1,600人を対象とした新入生調査の結果について分析を行い、設問の改良など、測定方法の改善を図った。</p> <p>レーダーチャート等でDP修得状況が表示できるよう教務情報システムの仕様作成を行った。</p> <p>学修成果について「CanDo」の形で明確に提示できるよう、シラバスの分析を開始した。</p> <p>↓</p> <p>学修成果について可視化することは、学生が学習状況について把握しやすくなるだけでなく、教員からも履修指導上のメリットが大きく、本学の担任制度がより有効に機能することに貢献できた。</p>

<p>提示できるよう検討を開始する。</p>	<p>※「H30.3月まで（後学期成績通知時）までに学生にレーダーチャート等でDP修得状況（到達目標達成度等）を提示する。」という計画は現在、遅れている。</p>
<p>H29.11月頃を目途に学修成果に関する数値情報を集約し、人材育成Annual Report（学修成果ファクトブック）を試作する。</p> <p>H29.12月末までに学生の学修成果を企業訪問で広報を行う。</p>	<p>学修成果Annual Report（学修成果ファクトブック）の作成に向けて、各種学生調査の概要（エグゼクティブ・サマリ）をまとめ、AP事業webサイトに掲載した。</p> <p>学生の学修成果についてはレポートを作成し、H29.12月に調査協力企業および卒業生に送付した。</p> <p>↓</p> <p>H29.3月には400社以上が集まる合同企業説明会で、各企業の出展ブースを訪問し、各企業に本学のDPを紹介することで、本学学生の採用時にどのような能力が期待できるのか、ということについて大学で適切に示す取り組みを開始できた。</p> <p>学生が身に付けるべき資質・能力を明確化し、大学がどのような人材を育成できるか対外的に示すことができた。</p>
<p>H29.8月、H30.2月に各学部において、助言・評価委員会（アドバイザーボード）による外部評価を実施する。H29.6月から学生の学修成果測定方法（直接測定・間接測定）の違いを把握するなどし、質保証システムの自己点検評価を実施する。</p>	<p>人文社会科学部では2回、教育学部では1回、理学部では1回、工学部では2回、農学部では2回のアドバイザーボードを開催し、学修成果の測定結果などをもとに学外の関係者から内部質保証システムや卒業時の質保証の方法などについて助言をうけた。（当部門としては、情報提供などで開催を支援した。）</p> <p>↓</p> <p>学外有識者（高校関係者、海外協定校教員、地元企業社長、他大学同分野部局の部局長、地元自治体関係者、卒業生等）から構成されるアドバイザーボードに対して、積極的に情報を公開し、地域社会、国際社会、産業界との接続で客観的な視点を取り入れた点検・評価を可能とした。</p>
<p>H29.5月頃から学修成果の間接測定と直接測定の分析内容を基に、来訪する卒業生からの意見聴取フォーマットを検討し、試行していく。</p>	<p>来訪する卒業生からの意見聴取フォーマットについては、各学部への聞き取り調査を行い、どのような卒業生がどの程度来訪しているのか、という情報を収集した。今後、聞き取り用フォーマットについて調整を進める。</p> <p>↓</p> <p>H29.2月およびH30.1月に実施した学生の卒業後の追跡調査により、卒業生の中には、大学に貢献したい、と考える者もいるが、なかなか具体的な貢献ができないままでもあることがわかった。</p> <p>金銭的負担や時間的に大がかりにならず、大学への来訪時に簡単に回答できるアンケートがあれば、定型的な調査とは、また別のチャンネルで学修成果情報を得ることができるだけでなく、教員らもフォー</p>

	<p>マットを媒介として卒業生が感じている本学の学修成果について体感的把握を行うことができる感触を得た。</p>
<p>H30.3月までに学修成果の測定法、改善への活用する仕組みについてFD等を通して学内提案を行う。</p>	<p>総合教育企画部門において入口から出口までの一貫した学生調査体系+企業調査の体系化を行ったことについて、多くの学部のFDにおいて説明を行った。</p> <p>↓</p> <p>FDについては、各学部に概ね好意的に受入れられた。全学的な教育改善と学生支援の各種施策に活用が期待される基礎資料作成の取組ができた。</p>
<p>H29.5月以降に普及活動として、IR・質保証・アセスメントセミナーを開催する。(年2回:1回2講座・計4回分)</p>	<p>H30年3月13日に公開型全学FD/SD(ルーブリック、授業改善)を開催した。</p> <p>3月20日には、同じテーマV採択校の東日本国際大学との勉強会を開催し、具体的なデータを相互に提示し課題解決に関する議論を行うことができた。この勉強会も普及事業の一環としてテーマVの開催校には解放し、実践的な地域別研究会を開催することができた。</p> <p>↓</p> <p>公開型全学FD/SDは学内外から36名の出席者があり、アンケートの結果、満足度は100%であった。</p> <p>東日本国際大学の取り組んでいる教育目標の分解メソッドやシラバスへの展開手法を学ぶことで、DPとカリキュラムとの関連付け(カリキュラム・マッピング)について、改善の糸口をつかむことができた。</p> <p>DPとカリキュラムとの関連付けは、シラバスにも示しているためDPと授業との関係をより分かりやすく学生へ示す手法のヒントが得られた。</p>
<p>H29.7月以降に普及活動として、IR初級人材育成セミナーを開催する。(年2回)</p>	<p>H29年10月28日に高知大学と共に「卒業時の質保証の取組の強化」のシンポジウムを開催した。その際に、内部質保証とIR(アセスメント)による支援についても報告を行い、本学におけるIRの実践的手法についても報告することができた。</p> <p>大学評価コンソーシアムが開催した「大学評価・IR担当者集会2018」において開催したIR初級/初心者セッションにおける講義、演習において本学AP事業の成果を提供した。</p> <p>4階層内部質保証およびそこへのIRからの支援モデルについては、鳥取大学、石川県立大学、愛媛大学、私大連盟等のFDセミナーで報告を行い普及活動の一環とした。</p> <p>↓</p> <p>AP事業の成果を国内に広く発表し普及に貢献した。AP事業の支援を受けた事業の成果を他大学に提供すると同時に、さまざまな意見</p>

② 部門の活動 [特色ある業務]

	<p>をもらうことで本学としてシステム改良のヒントを得ることができた。シンポジウムと同時開催のポスターセッションでは、本学ブースに多くの来場者があり、10 団体を超える大学関係者等の各々に要望される情報を提供できた。</p>
--	--

○ 共通教育部門

(1) 初年次教育部会(大学入門ゼミ、茨城学、情報リテラシー)

○ 「茨城学」の実施

3年目を迎えた「茨城学」は、平成29年度から全学教育機構共通教育部門の初年次教育部会で運営されることとなった。基盤教育科目の入門科目として開講され、約1,600名が履修した。夏季休暇をはさんだ第2クォーターと第3クォーターに毎週4クラス実施され、全学部の一学年が同時に受講する体制となった。夏季休暇を挟んだこともあり、授業進度に比例して学生の地域や茨城への関心、授業内容への知的欲求の高まりを感じた。

人文社会科学部と工学部の学生が共に受講することになり、教育学部以外の3クラスが学部混合のクラスになった。学部横断のクラス編成の増加は、これまで後期に受講していた理・工・農学部生の積極的な学修態度、アクティブ・ラーニングでの多様な意見交換につながった。また授業内容を総論から各論へと展開する構成に変更したことで、地域を考える「茨城学」の意義が明確になった。運営内容の向上を図る工夫として、「振り返り用紙」連絡欄に示された質問・要望等に対し、担当とCOCコーディネーターが回答内容を検討、相互コミュニケーションツールとしてQ&Aスタイルの印刷物を作成し、講堂ロビーに提示した。

平成29年度から、授業内容がCOCプラス参加校の常磐大学、茨城キリスト教大学、茨城県立医療大学及び茨城工業高等専門学校とVCS配信や録画したDVDを通して共有されることとなった。大学等の枠組みを超え、講義内容や、講師とのディスカッション時に出された意見を共有するという先進的な取り組みが行われた。

○ 関連イベント

① 「茨城学」FD・SDの実施

「茨城学」開講前の5月10日、COC地域志向教育プログラム部会、授業の実施に協力いただいている本学教員、自治体関係者、昨年度の受講生、及び授業運営をサポートするCOC専任コーディネーターや社会連携センター職員が一堂に会して「茨城学」FD・SDが行われた。

目的は、「茨城学」の実施に関わる教員、自治体の代表者に平成28年度「茨城学」の学生アンケート結果や平成29年度の「茨城学」の運営や変更点などについて説明するとともに、教員、自治体の代表者と授業の目標や課題を共有し、学生との意見交換を通して、授業の改善を目指すことにある。参加者は、過去の資料と課題、学生アンケート結果、運営の変更点などを把握し、授業目的を共有するとともに、学生の提案した授業改善案（質問箱の設置、専門用語の解説など）を検討した。このことにより、各担当者の授業運営に対する理解が深まり、その後の打ち合わせがスムーズになった。また、平成28年度に学生有志と開催した「茨城学@深掘りカフェ」の内容を伝え、学生と授業担当者が授業改善のために意見交換を行った。



②オープンキャンパスでの模擬授業

オープンキャンパスにおいて模擬授業「茨城学って何ですか？」を2回（10：15～11：05、11：30～12：20）実施した。授業の前半は講義とアクティブ・ラーニングの体験、後半は地域と連携して活動している大学生との交流というプログラムである。大学生は、模擬授業の運営サポートを行い、参加高校生とのグループワークを行った。

1回目は26名（1年生19名、2年生2名、3年生3名、不明2名）の参加者があり、県内のほか、福島県、埼玉県、千葉県の高校生が参加した。二回目の参加者は24名（1年生3名、2年生12名、3年生6名、不明3名）で、県内のほか、福島県、栃木県、東京都、秋田県からの参加があった。



模擬授業のアンケートには、「地元の良い所を紹介しあう『アクティブ・ラーニング』がとても楽しかった。長所についてもよく話し合えたし短所について改善点について話すことができた」、「茨城学がどのようなことをするのか分かった。地域に着目した授業なのでとてもおもしろくて興味が出た」、「他の県の観光の場所などは知っていたのですが、あまり自分の住んでいる県について知らなかったのが、良い経験だった」、「『茨城学』と聞いてイメージが湧かず、興味を

持ってこの授業を受けたのですが、とても面白そうで、学んだ後に活動してみたいなと個人的に思いました」、「茨城についてみんなでディスカッションを行ったことによって、自分が知らなかったこと、場所について知識が増え、興味を持ちました」などの感想が記された。

なお、授業サポートした大学生（工学部3年）がオープンキャンパス用に「茨城学」プロモーション・ビデオを作成し、ビデオは入学課入試広報係が入試広報活動で使用することとなった。

③ 「茨城学」深掘りカフェ

12月6日、図書館1Fラーニングcommonsにおいて、「茨城学」@深掘りカフェを行った。

「茨城学」を受講してみて、「あのテーマについて発表してみたかった」「もっと深く勉強してみたい」「『茨城学』をもっとこうしてほしい」と考えている学生が集まり、学年や所属に関係なく自由に話し合うことを目的としており、「茨城学」授業運営スタッフと学生たちが主体的に企画運営した。

出席者は13名で、学生（1年生4名、2年生2名、3年生1名）、教員（2名）、COC専任コーディネーター（3名）、学外の方（1名）である。進行役は学生が務めた。

講義内容、グループディスカッション、「茨城学」の運営などについて、小グループによるディスカッションも加えつつ話を進め、「茨城学」の改善と発展、運営側と学生の交流の促進につながる情報の共有ができた。学生の意見を参考にして、「茨城学」の内容、運営、及び学生への教育効果の更なる向上に向け、FDを通して下記の改善に努めていくこととした。



○ 講義への関心度を高めるため、講義の展開や振り返り用紙の様式等の向上を図る。

○ グループディスカッションのリード役としてキャプテン制を取り入れたが、その役割を果たしてもらえるように、リードの手法の提供や、ディスカッション雰囲気の向上に努める。

○ 「茨城学」受講生が授業への疑問や授業の改善要望などについて直接伝え応答を得られるような場として設け、可能な限り講義期間中に実施するように調整

する。

(2) プラクティカル・イングリッシュ部会

○ 部門の活動（特色ある業務）

- 29年度には、1) PE 部会全体 FD、2) 新任教員 FD、3) 学生支援 FD(部会員対象)、4) 学生支援 FD(全担当教員対象)の4種類のFDを開催し、非常勤講師を含む担当教員に対する授業運営サポートを行った。

1)については、非常勤講師を含む、授業担当教員全員を対象とした全体FDを年2回開催している。教員間の共通理解を築き上げるうえで重要な役割を果たしている。2)は、29年度より導入したFDで、プログラム拡大に伴い非常勤講師の入れ替えが大きくなる中、新規採用の非常勤講師がよりスムーズに授業を行えるよう、授業開始直後に実施された。3)、4)は、全学教育機構学生支援部門と連携し、同部門所属の矢嶋敬紘講師の協力により実施された。まず、PE部会員の学生支援に関する理解促進のために部会員対象のFDを実施、その

後、全担当教員を対象に「障害者差別解消法と授業における学生対応について」というタイトルで矢嶋講師によるワークショップ型 FD を実施した。学生支援については、全学的な取組が進んでいる一方で非常勤講師には情報が届きづらい側面があり、本 FD は非常勤講師と学生支援部門を繋ぐ役割を果たした。

- English Lounge, Communication Training 等の学修支援活動を行った。
- 全学教育機構の部門間連携に積極的に携わり、国際教育部門の行っている国際交流サロンの整備への協力や、学生支援部門と協力してプレゼンテーションやエッセイのルーブリック開発などに取り組んだ。

(3) 心と体の健康部会

熱中症予防に関する FD の実施 (H29.8.9. 心と体の健康担当教員 11 名)

日本体育協会熱中症ガイドラインの WBGT 基準を越える日々が続くことから、環境状況および実技授業後の学生アンケートを踏まえて、熱中症予防のための FD を行った。環境因（気候変動）、個人因（生活習慣）、授業因（日程自由度）があり、ハード面に加えて酷暑時期の実技と講義の組み合わせなどソフト面の対策が必要との意見があった。

文部科学省体力運動能力調査の実施 (H29.10.11-23)

心と体の健康の授業時に学生 442 名を対象として体力運動能力および生活習慣調査を行い、「定点観測」資料として全学教育機構論集にまとめた（2 編）。国際的および国内的に比較して低体力と生活習慣に課題があることを指摘した。

障害者差別解消法と心と体の健康についての FD (H29.11.20. 心と体の健康担当教員 10 名)

バリアフリー推進室の矢嶋先生による講義を拝聴し、とくに実技授業における合理的配慮について話し合った。身体的な障害への配慮とともに発達障害を背景とした諸課題について授業実践的な問題について取り上げた。

学生アンケートにもとづく FD の実施 (H30.1.10. 心と体の健康担当教員 11 名)

学生アンケートの結果はおおむね良好だった。望ましい生活習慣の日常化を図る取り組みが遅れており、生活習慣記録表の導入および教科書の改訂について論議した (H30 年度改定作業中)。なお、盗難防止と更衣室の充実に関する意見が多かった。

(4) 自然・環境・科学部会（科学の基礎、自然・環境と人間）

○ 部門の活動（特色ある業務）

1) プレイメントテストの作成、実施支援、統一授業のクラス分け

工学部の必修基礎教育科目科学の基礎「微積分学」「力と運動」のクラス分けのためのプレイメントテストとそのガイダンス支援のための説明書の作成と、その採点、及び採点結果をもとにしたクラス分けを行った（「微積分学」担当：小西、「力と運動」担当：山崎）。

2) 統一授業 基礎教育科目 科学の基礎「微積分学」「力と運動」について

統一授業 基礎教育科目 科学の基礎「微積分学」「力と運動」について以下のような活動を行っ

た(「微積分学」担当：小西、「力と運動」担当：山崎)

1. クラスの打ち合わせ会の運営
2. eラーニング教材の作成と改訂
3. 教科書の作成と改訂（編集委員会の立ち上げ、諸設定の検討を含む）
4. 試験問題の作成支援
5. 試験問題の全体および問題別の統計と全体成績の統計
6. 授業ノートとスライドの作成(力と運動のみ. 2018 年度開講授業用だが、作成は 2017 年度中

3) 科学の基礎質問室

入試の多様化や高校の学習指導要領の変更により、高校レベルの学習習得度格差が拡大し、高大接続のための学習支援が必要な学生は年々増大している。茨城大学では全学学生対象として教養の数学・物理学の習得度を底上げし、大学の教養レベルの該当科目にも対応できるようにすることを目的とし、修士、博士課程の学生を含む学部 3 年生以上の学生相談員（ピアサポーター）と教員相談員（小西、山崎）を配置して科学の基礎質問室を開室した。

○ 関連イベントの報告

2018 年 1 月 11 日(木) 10:20~11:50 に基盤教育科目 科学の基礎 の FD を行った。参加人数は 23 名（内訳 2017 年度前期 科学の基礎 担当教員 20 名、その他 3 名）で、学生アンケート結果や GPA などの指標をもとに選出した教員に講演を依頼し、講演内容をもとに授業改善に関する意見交換を行った（全体のまとめ担当：小西、水戸地区担当：小西・伊賀、日立地区担当：米山、阿見地区担当：上妻）。

(5) 多文化理解部会（異文化コミュニケーション、ヒューマニティーズ、パフォーマンス&アート）

■異文化コミュニケーション(初修外国語以外)

1) 活動（特色ある業務）に関して

①以下の短期海外研修を平成 29 年度より異文化コミュニケーション科目「多文化共生」として開講した。

- ・「短期海外研修 I II（スペイン）」
- ・「短期海外研修 I II（ブルネイ）」
- ・「短期海外研修 I II（韓国）」
- ・「短期海外研修 I II（マレーシア）」の開講

②以下の短期海外研修の開講を企画し、平成 30 年度の実施計画が承認された。

- ・「短期海外研修 I II（サンフランシスコ・ボランティア）」
- ・短期海外研修 I II（オーストラリア）」

2) 関連イベント

①海外留学説明会

5 月 17 日（於：理学部インタビュースタジオ）に、(1)①の短期海外研修を中心とした

海外留学プログラムについての説明会を行った。

②留学生・日本人学生協働発表会:「人間とコミュニケーション」(Studies in Contemporary Japan, Japanese Pop Culture)

7月25日～28日、図書館展示室において「留学生・日本人学生協働発表会」を実施した。上記2科目を履修する留学生・日本人学生が協働で日本の社会問題や文化について英語で発表を行った。

③カナダ・サイモンフレーザー大学とのオンライン学生交流:「多文化共生」(多文化共生)

サイモンフレーザー大学の日本語授業を履修している学生と、基盤科目の『多文化共生』科目を履修している学生とのオンラインによる学生交流を企画し、平成29年度後期1～2月に実施した。

④その他

- ・留学生と日本人学生のための歌舞伎鑑賞会

7月29日に「松竹大歌舞伎」(於:県民文化センター)を日本の古典芸能に関心を持つ留学生と日本人学生が鑑賞した。

- ・国際交流合宿研修

7月1日(土)・2日(日)に、国立磐梯青少年交流の家にて、国際交流合宿研修を実施した。3キャンパスから日本人学生、留学生78名が参加し、スポーツ、陶芸、座禅や野外炊飯などの活動を通して、相互理解と交流を深めた。

(6) 社会と生活部会(グローバル化と人間社会、ライフデザイン)

○ 「グローバル化と人間社会部会」の活動

- ・平成29年度後学期「グローバル化と人間社会」の履修状況データに基づいて、授業の精選を目的として議論を重ねた。その結果、平成30年度の第一クォーターと第二クォーターでの履修状況データ(平成30年10月頃入手可)をも考慮して慎重に検討していくことになった。

- ・平成30年6月14日、「グローバル化と人間社会」部会においてFDを実施した。とくに今後の課題として認識された点は、履修学生に対して授業外学修時間の積極的な取り組みを促進することである。部会では具体的かつ効果的な促進方法を検討していく必要性を改めて認識し、今後も議論を積み重ね、課題解決に向けて努力していくことで合意した。

- ・平成31年度実施計画の策定を、各学部の協力を得つつ遂行しているところである。

(7) グローバル英語プログラム部会

○ 部門の活動(特色ある業務)

29年度には、30年度から導入される「グローバル英語プログラム」の基本的な枠組みである1)ガイドラインの設定、2)「グローバル英語プログラムに関する申合せ」の作成を中心にプログラム設計を行った。

1) ガイドラインの修正

- ・ディプロマポリシーとの関連から「グローバル英語プログラム」で育成する4つの英語力を各

授業科目でどう育成するかを検討。

- ・ GEP プログラム科目（全学共通科目）の授業概要について「授業修了時の到達目標」「英語使用割合」等の各科目のシラバス作成時に求められる授業のコア部分の設定。
- ・ 「方法及びアクティブ・ラーニングに関する方針」，「授業時間外学修」の内容（自律的学習）の設定，および総合的多面的な評価方法の検討。
- ・ 履修資格要件の検討
- ・ プレ GEP 科目の設定と GEP 科目としての認定方法
- ・ プログラムの構成及び科目区分の検討

全学部生必修の基盤教育科目「プラクティカル・イングリッシュ（PE）」を基礎に、別表のプログラム科目（全学共通科目）、AIMS 科目（全学共通科目）及び各学部が指定する専門科目（留学などの単位修得により専門科目として認定された科目を含む。）を履修し、次の単位を修得した者を修了認定する。

- 2) 「グローバル英語プログラムに関する申合せ」として履修届の提出方法、プレ GEP の指定、専門科目の指定方法等について検討し原案を作成した。

(8) 日本語教育プログラム部会

(1) 活動（特色ある業務）に関して

外国語としての日本語を指導するために必要な専門知識と基礎能力の習得を目的としたプログラムである。人文社会科学部と教育学部の学生を対象としている。人文社会科学部のサブメジャーになっている。

◎日本語教育プログラム「日本語教授法演習(海外)」

「日本語教育プログラム」の最終科目で、教育実習を含む「日本語教授法演習(海外)」の実施校にウィスコンシン州立大学、アイダホ州立大学、レンヌ第一大学が 2017 年度から加わり、7 校となった。また、同科目は「海外協定校におけるインターンシップ型日本語教師養成プログラム」として日本学生支援機構の平成 30 年度海外留学支援制度（協定派遣）短期研修・研究型（タイプ A）に採択された。

(2) 関連イベントの報告

①アラバマ大学バーミングハム校講師によるセミナー実施(6月7日)

米国アラバマ大学バーミングハム校で日本語教育に携わる高宮優実氏を迎え、「アメリカにおける日本語教育」と題し、アメリカで日本語を教えるために必要な表現・スキル・手法についての講演を実施した。

②ブルネイ・ダルサラーム大学との授業交流(10月28日、30日)

ブルネイ・ダルサラーム大学で日本語授業を履修している学生と、同プログラム「日本語教授法 I」を履修する学生とのオンラインによる学生交流を行った。

③ウィスコンシン州立大学スペリオール校との授業交流(11月30日)

ウィスコンシン州立大学スペリオール校で日本語授業を履修している学生と、同プログラム「日本語教授法 I」を履修する学生とのオンラインによる学生交流を実施した。

(9) COC 地域志向教育プログラム部会

1) 部門の活動 (特色ある業務活動)

① 「5 学部混合地域 PBL」 の実施

全学教育機構の設立にともない、大学 COC 事業の地域志向教育プログラムは同機構に位置付けられた。地域志向科目は、基盤教育の実施による新設も含め、88 科目が創意工夫のもとに行われた。3 年目を迎えた全学生必修の「茨城学」については、同機構初年次教育部会で運営されることとなり、全学共通科目の「5 学部混合地域 PBL」は、Ⅰ・Ⅱに加えてⅢが新規開講された。

「5 学部混合地域 PBL Ⅰ (1 年生以上対象、連携先：ひたちなかまちづくり株式会社ほか)、同 Ⅱ (2 年生以上対象、連携先：株式会社サザコーヒーほか)、同 Ⅲ (1 年生以上対象、連携先：茨城県ほか) はいずれも夏季集中で実施された。それぞれ約 39 名・13 名・23 名の参加があった。

平成 28 年度は「茨城学」を前学期に受講した教育学部と人文学部生の受講が多かったが、今年度は全学部で第 2 クォーターから開講したため、理系学生の参加が増えた。授業アンケート結果より、クラス満足度の 3 科目平均値は 0.91 である。また、PBL Ⅰ・Ⅱの授業の様子が『茨城新聞』9 月 12 日号に掲載され、社会からの関心の高まりを感じた。

② アンケートの実施

基盤教育科目および大学院における地域志向科目の授業担当教員にアンケートを実施した。結果から、さまざまな工夫をしながら地域志向教育を実施していることがわかった。これらをまとめて、『平成 29 年度茨城大学 COC 事業報告書』に掲載した。

2) 関連イベント

① ひたちなか表町商店街活性化プロジェクト



ひたちなか風土記」事業における学生のインタビュー

「5 学部混合地域 PBL Ⅰ」の授業後、受講生(1 年生 6 人)が「ひたちなか表町商店街活性化プロジェクト」を立ち上げ、10 月の学生地域参画プロジェクト (スタートアップ支援) に応募、採択された。11 月にひたちなか商工会議所、ひたちなか市役所、「PBL Ⅰ」の講師とともに、表町商店街にある市民交流拠点「ふらっと」の新たな活用法について意見を交換した。12 月にはひたちなか市でまちづくりに参加する人々が主催した「ひたちなか表町の活性化検討ミーティング」に参加し、ワークショップや意見交換を行った。平成 30 年 2 月には、「ひたちなか風土記」事業の第一回に参加した。本事業は「まちの老舗企業の物語を若者が紡ぎ

共感を得るカタチに変えること」を目的としており、学生たちは表町商店街老舗企業の代表者へインタビューを行った。

②「茨城学」FD・SDの開催

5月10日、COC地域志向教育プログラム部会、授業の実施に協力いただいている本学教員、自治体関係者、昨年度の受講生などが一堂に会して「茨城学」FD・SDが行われた。詳細については、初年次教育部会（「茨城学」）を参照されたい。

(10) 地域協創人材プログラム部会

1) 部門の活動（特色ある業務活動）

① 「茨城学」のCOCプラス参加校への配信

大学間連携地域志向科目である茨城大学全学教育機構基盤教育科目「茨城学」のCOCプラス参加校への配信による授業の共有化を開始した。時間割が合わない茨城高専についてはDVD録画で学内閲覧可能とすることで共有した。茨城大学では全学必修科目のため1624人、茨城キリスト教大学では40人、常磐大学では58人、県立医療大学では52人の学生が受講した。各大学受講生の意見や感想、授業及びVCS配信（接続）に関する方法・問題点等について、平成30年2月に各大学担当教員で集まり議論・検討を行った。平成30年度はそこでの協議事項を反映させ授業を実施する。



↑ 茨城大学での「茨城学」開講の様子（左）とVCSによる参加校での配信の様子（右）

②「仕事を考える」

地域協創人材教育プログラムを構成する就業支援科目として、県内企業へのプレインターンシップ（1 day インターンシップ）を組み込んだ「仕事を考える」を開設し、工学部及び農学部の1年次54名が受講した。なお、本授業は旧カリキュラム教養科目である「ものづくりと社会」「仕事と社会」を前身とし、キャリアセンターが第4Qから実施している。



↑ (株) 旭物産 (写真左) と日立オートモティブシステムズ(株) (写真右) 訪問時の様子

2) 関連イベント

① インターンシップマッチングフェアの開催

インターンシップ科目への関連イベントとして、地域企業との連携強化に向けた学生への情報提供とマッチング環境の整備のため、「インターンシップマッチングフェア」を平成 29 年 7 月 6 日に開催し、本学及び COC プラス参加校の学生計 72 名が参加した。参加者からは「自身の専門分野とは異なる業界も知ることができて良かった (学生)」「学生さんと直接話をすることで学生の希望や気質を知ることができた (企業)」等の声があり、満足度調査では参加学生の 99%、参加企業(23 企業)の 90%から「満足」以上の回答を得た。



② インターンシップセミナーの開催

インターンシップ科目の関連イベントとして、学生のインターンシップ受入企業先の拡大や実施内容の更なる充実を目的に「経営者のためのインターンシップセミナー」を平成 29 年 10 月 11 日に開催した。まだインターンシップを実施したことが無い、あるいは実施したいが実施方法がわからない企業に対し、実際にインターンシップに取り組んでいる、取り組み始めた企業等の代表者や担当者、さらにインターンシップを経て採用された若手社員が登壇し、インターンシップのメリットや実施方法、実施する上での注意点等の事例を交え解説することで、地元企業におけるインターンシップ導入の機運を高めることができた。県内企業等の経営者及び採用担当者ら 60 名が参加した。



③ マルシェ・ド・カサマロンの開催

COC プラス参加大学間相互に乗り入れ可能な地域 PBL/インターンシップ科目の実現に向けて、その先駆的事業として H29 年 12 月 3 日に「マルシェ・ド・カサマロン」を開催した。当該イベントは、茨城の名産品である笠間の栗の六次産業化促進をベースに、地元企業との協働教育型 2 日間インターンシップ（1 日目：各企業での事前研修、2 日目合同イベントでの商品販売）の形で実施し、計 19 名（茨城大学 7 名、茨城キリスト教大学 3 名、常磐大学 7 名、茨城高専 1 名）の学生が参加した。



(11) AIMS プログラム部会

1) AIMS 部門の活動

AIMS (ASEAN International Mobility for Students) プログラムとは、マレーシア、インドネシア、タイの各国政府による共同の学生交流支援事業（平成 22 年開始）が起源となる、アジア発の国際教育プログラムである。現在は東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO) の高等教育開発センター (RIHED) がプログラムの運営を統括しており、平成 24 年にベトナムが、平成 25 年にはフィリピン、ブルネイ、そして日本（茨城大学を含めて 11 大学）が参加した。平成 28 年には韓国が正式に加盟し、ASEAN+3 を包括する国際連携教育システムへと拡大しつつある。

茨城大学は、東京農工大学を幹事校として、首都大学東京とともに「ASEAN 発、環境に配慮した食料供給・技術革新・地域づくりを担う次世代人材養成」というテーマで大学の世界展開力強化事業（平成 25 年度）に採択され、AIMS 加盟校となった。本学は、地域社会の持続的発展の基礎となる安全な地域づくりと環境保全に主眼をおいた「地域サステナビリティ学コース」として、「環境変動適応・防災論」や「地域環境管理論」、「環境共生論」、「環境保全型農業論」

など10科目15単位の特色あるAIMSプログラム科目を提供している。主な受講者は、本学が交流するAIMS加盟大学6大学（ボゴール農科大学，ガジャ・マダ大学，スリウィジャヤ大学，カセサート大学，チェンマイ大学，ブルネイ・ダルサラーム大学）から来日するインドネシアおよびタイの留学生である。

アジアが「環境と調和した多文化共生社会の持続的発展」の道をたどるのかどうかは、世界の未来を左右するほどの影響がある。その実現に貢献することは、サステナビリティ・サイエンスに力を入れる本学にとっても重要な課題である。本プログラムの目的は、「アジアの持続可能な成長に貢献する地域リーダーの育成」であり、国際教育連携を推進することで、さまざまな産業を取り巻く環境と地域社会の抱える様々な問題を解析し、持続可能な社会を実現するための自立的な問題解決能力を有するグローバル人材の育成が期待できる。

2) AIMS 関連イベントの報告

AIMSプログラム科目は、主にはAIMS加盟大学からの留学生を対象とする科目群であるが、本学学生も英語による専門科目への挑戦，あるいは留学の準備として受講することが可能である。AIMSプログラムに関わる学生の派遣および受け入れ事業はAIMSプログラム運営委員会が所掌し、円滑効率的に運営してきている。受入学生に対しては授業科目の開講に留まらず、来日期间全体を通して受入プログラムとして管理運営しており、入国から帰国まで担当教職員が一貫してサポートを提供することで、受入学生の安全管理と満足度の向上に寄与している。また、英語による授業の受講のみを前提とした留学生の数が増加したことで、学内環境の二言語化や生活面のサポートに取り組むことが必要不可欠となり、学習環境の国際化推進に影響を与えている。さらに、地域サステナビリティ学セミナー・ラボワーク（計3単位）を設定し、学生たちの希望に沿って2つの研究室に配属して継続的な実験・実習の機会を提供することで、十分な研究体験を与えるとともに、本学学生との密接な交流が実現している。AIMS派遣学生の増加にともない、相互交流の機会が飛躍的に増加しており、地域の国際交流協会との連携が促進されるなど、多方面で効果が認められている。

○ 学生支援部門

1. はばたく茨大生 春の報告会 主催 (資料 その他-1)

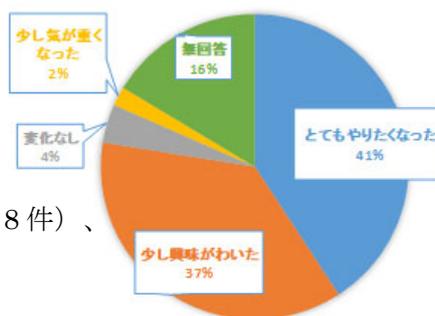
日時：2017年5月31日(水) 13:00～15:30

場所：茨城大学理学部 K 棟 1F インタビュースタジオ

内容：前半後半に企画を分け、前半口頭発表(8分/件,計8件)、
後半ポスター発表(18件)

参加者：約100名

成果評価：参加者アンケートでは、この企画に参加して学外学修への関心は参加差者の78%の者で高まったとしており、企画目的は概ね達成できたものと判断された。



2. 2017 前期 学長と学生の懇談会 主催 (資料 その他-2)

日時：2017年7月24日(月) 14:00～17:00

場所：水戸キャンパス 共通教育棟 2号館 4F 47番教室

内容：新入生を対象に大学入学前後での大学生活における印象の違いをはじめ、大学生活全般で感じたことなどについて即時統計表を
用いて学長が質問しながら議論を深めた。

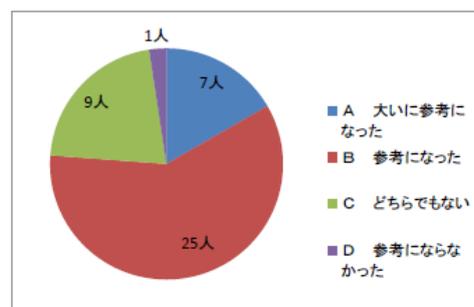


出された学生の意見は当該部局に問い合わせ、対応内容一覧を学内に掲示し学生への周知を図り、学生と教職員とのパートナーシップ向上を目指した。

参加者：学生53名(5学部、1年次)、教職員11名(三村学長、太田理事・副学長ほか)。

成果評価：懇談会終了後の参加学生を対象としたアンケート調査結果から、概ね目的は達成されたと判断された。

1. 懇談会の内容は参考になりましたか?



3. 2017 後期 学長と学生の懇談会 主催 (資料 その他-3)

日時：2017年12月6日(水) 14:00～17:00

場所：水戸キャンパス 共通教育棟 2号館 4F 41番教室

内容：学部2～4年次を対象として、これまでの学生生活全般を通して感じたことから、茨大における学習環境及び学生生活向上に向けて様々な視点から意見要望を出してもらい、三村学長の進行のもと議論を深めた。前期の懇談会と同様、出された学生の意見は当該部局に問い合わせ、対応内容一覧を学内に掲示し学生への周知を図り、学生と教職員とのパートナーシップ向上を目指した。

参加者：学生43名(5学部、2～4年次)、教職員9名(三村学長、太田理事・副学長ほか)。

成果評価：懇談会終了後の参加学生を対象としたアンケート調査結果から、概ね目的は達成されたと判断された。

4. 学長と理学部代表学生との懇談会 主催 (資料 その他-4)

日時：2017年11月22日(水) 14:00～15:00

② 部門の活動 [特色ある業務]

場所：水戸キャンパス 学長室

内容：理学部における教職員と学生との懇談会（理学部モニター会）にて学生から出された意見要望のうち、学部では対応不可能であり全学で検討してほしい内容があり、それらについて理学部代表学生と学長が直接話し合う場を設け、改善に向け意見交換した。

参加者：学生 7 名（理学部、1～4 年次）、教職員 6 名（三村学長、太田理事・副学長、西川執行部スタッフ（学生支援）、中井英一（理学部 教学点検委員長）、野澤恵（理学部 教員）、二橋美瑞子（理学部教員））。

成果評価：少人数での濃密な意見交換になった。

懇談会后、議論にあがった 1 つの駐車場の木の整備が行われた。



5. バリアフリー推進室関連

1-① 体制整備

- (1) 茨大なんでも相談室を 3 キャンパスとも機能強化し、原則臨床心理士がインターカーとして対応するようにした。 延べ相談人数：794 名（茨大なんでも相談室 3 キャンパス合計）
- (2) バリアフリー推進室日立分室、阿見分室を新設し、臨床心理士が相談対応する等機能強化を行った。

バリアフリー推進室	区分	水戸	日立	阿見	計
延べ人数 (名)		933	352	234	1519
キャンパス別相談件数	実人数 (名)	113	51	37	201

※参考として、H28 年度バリアフリー推進室・修学支援室（水戸キャンパス）の相談件数 ⇒ 延べ人数 307 名 実人数 41 名

- (3) 主に発達障害や精神障害のある学生の学習や休息のスペースとして、自主学习室(やすらぎルーム)を水戸キャンパス共通教育棟 1 号館 131 室に設置し、試験的運用を開始した。利用延べ人数 135 名
- (4) ピアサポーターの養成及びその活動場所としてピアサポ室を水戸キャンパス共通教育棟 1 号館 110 室に新設し、平成 30 年 4 月 1 日スタートに備えた。
- (5) 「茨城大学における障害のある学生のためのバリアフリー推進に関する基本方針」を制定した。

- (6) 平成 30 年度入試から障害等のある入学志願者の事前相談窓口を入学課からバリアフリー推進室へ変更し、入学志願者の利便性向上を図った。⇒ 受験上等配慮人数 実人数 7 名、述べ相談人数 20 名

1-② 学生支援関連 FD の実施

障害のある学生支援関連 FD を、全学部及び全学教育機構において計 8 回実施した。⇒ 参加教職員計 378 名

- (1) 障害者差別解消法と合理的配慮の具体的実施について

参加者：農学部 教職員 49 名

日時：平成 29 年 3 月 15 日（水）13 時 30 分-14 時 00 分（前年度末先行実施）

場所：農学部第 1 会議室

- (2) 障害者差別解消法施行後の学生支援について

参加者：工学部 教職員 119 名

日時：平成 29 年 4 月 19 日（水）13:15～13:45

場所：工学部 E5 棟 8 階イノベーションルーム



- (3) 障害者差別解消法施行後の学生支援について

参加者：全学教育機構 教職員 48 名

日時：平成 29 年 5 月 31 日（水）16:00～16:30

場所：共通教育棟 1 号館 1 階第 1 会議室

- (4) 障害者差別解消法施行後の学生支援について

参加者：人文社会科学部 教職員 42 名、理学部 教職員 38 名

日時：平成 29 年 6 月 21 日（水）13:00～13:40

場所：人文社会科学部講義棟 15 番教室／理学部第 8 講義室（VCS で配信）

- (5) 障害者差別解消法施行後の学生支援について

参加者：教育学部 教職員 82 名

日時：平成 29 年 7 月 19 日（水）13:15～14:00

場所：教育学部 A 棟 2 階プレゼンテーションルーム

- (6) 学生支援事例対応について

参加者：全学教育機構共通教育部門プラクティカル・イングリッシュ 部会 6 名

日時：平成 29 年 7 月 19 日（水）14:30～15:50

場所：共通教育棟 1 号館 2 階 200-B 室

- (7) 障害者差別解消法と授業における学生対応について

参加者：全学教育機構共通教育部門プラクティカル・イングリッシュ 部会 19名

日時：平成29年11月27日（月）12:10～13:10

場所：共通教育棟1号館2階2A講義室

(8) 授業における発達障害のある学生への対応について

参加者：全学教育機構共通教育部門心と体の健康部会 13名

日時：平成29年11月20日（月）12:00～12:30

場所：教育学部D棟109室

1-③ いきいき茨城ゆめ大会 iOP 関連

本学学生を対象とした、いきいき茨城ゆめ大会2019ボランティアiOP準備のための説明会を茨城県庁協力のもと2回実施した。

参加者：67名（人・教・理・工学部）

日時：平成30年1月24日（水）13:00-14:00

場所：人文社会科学部講義棟10番教室



参加者：8名

日時：平成30年2月13日（火）16:00-17:00

場所：共通教育棟2号館22番教室

1-④ ピアサポーター関連

障害等のある学生を学生同士で支援するピアサポーター制度の充実のため研修会等を実施した。

(1)ピアサポーター育成

登録者:18名（情報提供希望者66名（左記含む））

(2)ピアサポーター研修会

・ ノートテイク講座

参加者：学生計16名

日時：平成29年5月17日 13:00-15:30 及び 平成29年5月24日 13:00-15:30

場所：共通教育棟2号館21番教室

・ 車いす介助講習

参加者：学生1名 教員5名 職員1名

日時：平成29年8月25日 10:30-12:00

場所：共通教育棟1号館111室及び水戸キャンパス構内

・ 平成29年度第1回ピアサポーター説明会

参加者：学生10名

日時：平成29年9月11日（月） 10:30-12:00

場所：共通教育棟 2 号館 21 番教室

・平成 29 年度第 2 回ピアサポーター説明会

参加者：学生 9 名

日時：平成 30 年 3 月 26 日（月）10:30-12:00

場所：共通教育棟 2 号館 22 番教室

1-⑤ アクセシビリティリーダー育成関連

多様な可能性を開拓する社会の構築を推進していくために必要なアクセシビリティに関する知識・技術・経験とコーディネート能力をもった人材を輩出することを目的とした、アクセシビリティリーダーの育成のための体制整備等を行った。

H29 年度は、アクセシビリティリーダー育成協議会より、本学の加入及び、アクセシビリティリーダー教育第 1 課程の承認を得て所定の講座を開講し、本学からアクセシビリティリーダー認定試験 2 級合格者 15 名（内、学生 6 名、教員 4 名、職員 5 名）を輩出した。



1-⑥ 広報活動

学生支援センターWEB サイト構築、運用開始 (<http://ssc.lae.ibaraki.ac.jp/>)

6. キャリアセンター関連

2-① 就職ガイダンス

日時：毎週水曜 3 限

開催回数：34 回（水戸キャンパス）

参加者：合計 2235 名

場所：図書館 1 階共同学習エリア ほか

内容：学生のインターンシップ参加や就職活動支援ガイダンス

2-② 合同企業説明会

日時：2018 年 3 月 2 日（土）、3 日（日）、4 日（月）10:30～17:30

場所：図書館 1 階共同学習エリア

内容：学部 3 年生、修士 1 年生を対象とした就職のための企業説明会

参加者：学生延べ人数 543 名、企業 216 社



2-③ インターンシップマッチングフェア

(1) 茨城大学学内インターンシップマッチングフェア キャリアセンター主催

日時：2017 年 11 月 8 日（水）14:30～16:20

場所：図書館 1 階共同学習エリア

内容：茨城県内企業への就職を考える、学部 1 年～3 年生を対象とした、企業等 15 社のインターンシップマッチングフェア

参加者：48 名



(2) 業界研究・インターンシップマッチングフェア COC プラス
事業と共催

日時：2017 年 7 月 8 日（土）13:00～16:00

場所：三の丸ホテル

内容：学部 1 年～3 年生を対象とした企業等 23 社のインターンシップマッチングフェア

参加者：72 名（内茨大生 32 名）

2-④ 業界研究

(1) 地元企業魅力発見セミナー キャリアセンター主催

日時：2017 年 10 月 18 日（水）14:20～15:50

場所：図書館 1 階共同学習エリア

内容：学部 1 年～3 年生を対象とし、地元企業の OB・OG と地元で働くことなどについて考えるセミナー

参加者：12 名

(2) 企業訪問バスツアー キャリアセンター主催

日時：2017 年 11 月 1 日（水）13:00～17:40

場所：（株）旭物産、木内酒造合資会社

内容：企業を訪問し、会社説明・職場見学・若手職員との座談会・質疑応答

参加者：8 名

(3) 業界研究会

日時：10 月～2 月

場所：キャリアセンター

参加企業：12 業界

内容：学生が直接業界の情報が濃密にできる機会として学内に企業を迎え開催

2-⑤ 実践的な就職支援

(1) 就活ベーシック講座

開催回数：6 回

内容：少人数でのエントリーシート作成指導、面接対策

参加者：延べ 56 名

(2) 面接練習会

開催回数：15回

参加者：36名

(3) グループディスカッション対策講座

開催回数：22回

参加者：128名

(4) 就職模擬面接会 人文学部と共催

開催日：2018年1月10日（水）

場所：人文学部

内容：2社の企業人事担当者を迎えての模擬面接会

(5) 内定者セミナー 人文学部と共催

開催日：2018年1月17日（水）

場所：図書館1階共同学習エリア

内容：今年度内定の決まった4年生による3年生への就活のノウハウの説明会

(6) 内定者による就活支援サークル'With'主催の講座・イベント

開催日：1月～2月 複数回開催

場所：キャリアセンター

内容：これから就職活動をする3年生に対しグループディスカッションの練習、キャリアセンターイベントの広報等

2-⑥就職支援関連における上記以外の活動

・未内定学生の就職支援

未内定学生の就職活動を支援するための6月末から7月にかけて学部4年生、修士2年生向けの学内個別説明会を企画し、11社25名の参加があった。

・茨城県と茨城大学における就職促進に関する協定書の締結

7/25 茨城県と茨城大学が互いに連携・協力し、大学等における地方創生の取り組みに資するとともに、本県へのUIJターンと地元就職・定着の支援を通じて、地域産業を担う人材の確保と地元定着を図ることを目的として「茨城県と茨城大学における就職促進に関する協定書」を締結した。（県と協定を結んだのは本学含め県内5大学、県外7大学）

・インターンシップ参加保険の見直し

インターンシップに参加する際の加入保険の取扱いを見直し、今まで保険の対象外となっていたインターンシップを学生の届け出を受け、大学行事として認めることで、これらのインターンシップについて保険の対象内で扱えるようにした。

・就職応援ブック編集発行

学生の就職活動を支援するため、学部3年、修士1年生を対象とした「茨城大学就職応援ブッ

ク」を発行した。

・留学生のための就職説明会

H29 年度初の試みで、H29 年度は共通教育棟 1 号館 1F キャリアセンター内にて 2 回開催し、参加者は延べ 21 名だった。内容は、日本での就職を希望する留学生に対し、就職活動の基本（日本の採用システム、提出書類、面接の方法）について概要を説明した。

7. その他

3-① はばたく茨大生 春の報告会 主催 【資料 その他-1】

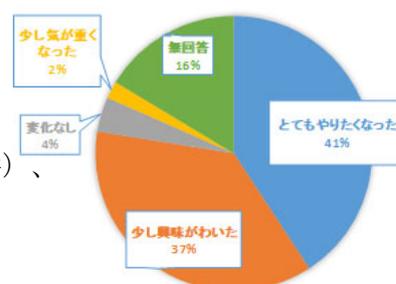
日時：2017 年 5 月 31 日（水）13:00～15:30

場所：茨城大学理学部 K 棟 1F インタビュースタジオ

内容：前半後半に企画を分け、前半口頭発表（8 分/件,計 8 件）、後半ポスター発表（18 件）

参加者：約 100 名

成果評価：参加者アンケートでは、この企画に参加して学外学修への関心は参加差者の 78%の者で高まったとしており、企画目的は概ね達成できたものと判断された。



3-② 「ICAS サステナ対話の広場」への「2017 年度 はばたく茨大生 春の報告会」ポスター展示 協賛(主催：ICAS) 【資料 その他-2】

日時：2017 年 5 月 22 日（水）～6 月 2 日（金）9:00～17:00

場所：茨城大学 図書館本館 1F 展示室

内容：①の企画についての前宣伝を兼ね、①のポスターを ICAS 主催の「ICAS サステナ対話の広場」の企画の一部として展示した。

3-③ 2017 前期 学長と学生の懇談会 主催 【資料 その他-3】

日時：2017 年 7 月 24 日（月）14:00～17:00

場所：水戸キャンパス 共通教育棟 2 号館 4F 47 番教室

内容：新入生を対象に大学入学前後での大学生活における印象の違いをはじめ、大学生活全般で感じたことなどについて即時統計表示されるクリッカーを用いて学長が質問しながら議論を深めた。



出された学生の意見は当該部局に問い合わせ、対応内容一覧を学内に掲示し学生への周知を図り、学生と教職員とのパートナーシップ向上を目指した。

参加者：学生 53 名（5 学部、1 年次）、教職員 11 名（三村学長、太田理事・副学長ほか）。

成果評価：懇談会終了後の参加学生を対象としたアンケート調査結果から、概ね目的は達成されたと判断された。

3-④ 2017 後期 学長と学生の懇談会 主催 【資料 その他-4】

日時：2017年12月6日（水）14:00～17:00

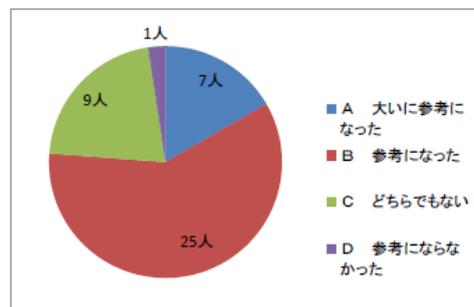
場所：水戸キャンパス 共通教育棟 2号館 4F 41番教室

内容：学部2～4年次を対象として、これまでの学生生活全般を通して感じたことから、茨大における学習環境及び学生生活向上に向けて様々な視点から意見要望を出してもらい、三村学長の進行のもと議論を深めた。前期の懇談会と同様、出された学生の意見は当該部局に問い合わせ、対応内容一覧を学内に掲示し学生への周知を図り、学生と教職員とのパートナーシップ向上を目指した。

参加者：学生43名（5学部、2～4年次）、教職員9名（三村学長、太田理事・副学長ほか）。

成果評価：懇談会終了後の参加学生を対象としたアンケート調査結果から、概ね目的は達成されたと判断された。

1. 懇談会の内容は参考になりましたか？



3-⑤ 学長と理学部代表学生との懇談会 主催 （資料 その他-5）

日時：2017年11月22日（水）14:00～15:00

場所：水戸キャンパス 学長室

内容：理学部における教職員と学生との懇談会（理学部モニター会）にて学生から出された意見要望のうち、学部では対応不可能であり全学で検討してほしい内容があり、それらについて理学部代表学生と学長が直接話し合う場を設け、改善に向け意見交換した。

参加者：学生7名（理学部、1～4年次）、教職員6名（三村学長、太田理事・副学長、西川執行部スタッフ（学生支援）、中井英一（理学部 教学点検委員長）、野澤恵（理学部 教員）、二橋美瑞子（理学部教員））。

成果評価：少人数での濃密な意見交換になった。懇談会后、議論にあがった1つの駐車場の木の整備が行われた。

○ 国際教育部門

・国際教育部門の平成 29 年度の活動記録は以下のとおりである。

【部門の活動・定例業務】

月	活動記録
4月	4月3-5日ー交換留学生オリエンテーション 4月3日ー交換留学継続生のためのガイダンス 4月5日ー外国人留学生新入生ガイダンス（写真1） チューターガイダンス
5月	5月2日ー日本語研修コース受講生学外研修旅行（川越） 5月17日ー海外留学説明会 5月24日ー海外ボランティア・TOEFL説明会
6月	6月1日ー阿見キャンパス留学交流室開設 6月2-4日ー日本語研修コース受講生のホームステイ 6月7日ーアラバマ大学バーミングハム校講師によるセミナー実施 6月21日ー海外留学サロン 日本語研修コース『茶道・華道体験』 6月27日ー水戸市の姉妹都市アナハイム市の学生親善大使との交流
7月	7月1-2日ー国際交流合宿研修 7月6日ー日本人学生と留学生の七夕会（阿見キャンパス留学交流室） 7月12日ー派遣留学生のための留学前ガイダンス 韓国仁済大学校学生・教員の本学訪問（講義及び懇談会実施） 7月19日ー交流室チューター交流会（水戸キャンパス・阿見キャンパス） 交換留学生向け帰国前ガイダンス（前学期） 7月22日ーオープンキャンパス「国際交流留学案内」 7月25-28日ー「留学生・日本人学生協働発表会」(Studies in Contemporary Japan, Japanese Pop Culture, 日本語研修コースレベル3口頭表現)
8月	8月9日ー高校生向けの公開講座「ちがいをたのしむー多文化共生へのはじめの一歩ー」
9月	9月21日ー学生交流促進のためのワークショップ（資料2-73） 9月24-26日ー日本語研修コースのオリエンテーション
10月	10月11日ー協定校派遣留学説明会 10月14日ー日本語研修コース茶道・華道体験 10月25日ー留学生、チューター、教職員のための国際交流パーティー 10月30日ー国際交流ハローウィンパーティー（阿見キャンパス） 10月28・30日ーブルネイ・ダルサラーム大学の学生との授業交流（別紙資料2-72）
11月	11月1日ー留学生のための就職説明会 11月11日ー留学生同窓会 11月18日ー公開講座「多文化共生ワークショップ」

	11月24日ー海外ボランティア・TOEFL説明会
12月	12月1日ーウィスコンシン州立大学スペリオル校との授業交流 12月1-3日ー日本語研修コース受講生ホームステイ 12月12日ー工学部新2年留学生と日立キャンパス交流室チューターの交流会（別紙資料2-71）
1月	1月31日ー海外派遣留学生のための危機管理ガイダンス 交換留学生向け帰国前ガイダンス（後学期）
2月	2月7日ー日本語研修コース受講生学外研修旅行（鹿島） 2月15日ー阿見・日立キャンパス向け海外留学危機管理セミナー
3月	3月30日ーサポート隊ガイダンス



新入生ガイダンス

② 部門の活動 [特色ある業務]



7月1-2日—国際交流合宿研修



11月11日茶道体験

【部門の活動・特色ある業務】

1. 新規協定校の開拓

- ① アイダホ州立大学（アメリカ）と大学間交流協定締結
本学とアイダホ州立大学（アメリカ）の間で大学間交流協定が締結された。本学学生の留学希望者の多い英語圏への派遣枠確保と、留学生の受け入れが期待できる。
- ② レンヌ第一大学（フランス）と部局間交流協定締結
本学の全学教育機構と人文社会科学部がフランスのレンヌ第一大学の経営大学院（IGR-IAE Rennes, Graduate School of Management）と部局間交流協定を締結した。本学学生の留学希望者の多いヨーロッパへの派遣枠確保と、留学生の受け入れが期待できる。
- ③ NASFA への参加
平成 29 年 5 月に世界中の国際交流担当が集結する NAFSA が開催され、本学協定校への挨拶や、新たに西欧諸国の大学とコンタクトを増やした。今後新規コンタクト先への短期語学研修を検討する。

2. 短期海外研修の企画及び実施

- ① 「短期海外研修 I II（スペイン）」の開講
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修 I II（スペイン）」を開講した。スペイン・アルカラ大学において夏期短期語学研修が実施され、本学より 2 名の学生が参加した。
- ② 「短期海外研修 I II（ブルネイ）」の開講
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修 I II（ブルネイ）」を平成 29 年度 8～9 月に開講した。ブルネイ・ダルサラーム大学において 4 週間にわたる英語研修が行われ、本学より 14 名の学生が参加した。
- ③ 「短期海外研修 I II（韓国）」の開講
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修 I（韓国）」を開講し、本学から 10 名（学部生 8 名、大学院生 2 名）が研修に参加し、学部生 8 名が同科目を履修した。
- ④ 「短期海外研修 I II（マレーシア）」の開講
基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修 I II（マレーシア）」の開講を企画している。平成 29 年度 10 月より募集を開始し、3 月に 2 週間 5 名派遣した。
- ⑤ 「短期海外研修 I II（サンフランシスコ・ボランティア）」（30 年度実施予定）の開講を企画
平成 30 年度の基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修（サンフランシスコ・ボランティア）」の開講を企画し、実施計画が承認された。
- ⑥ 「短期海外研修 I II（オーストラリア）」（30 年度実施予定）の開講を企画
平成 30 年度の基盤科目の多文化共生科目として「短期海外研修（オーストラリア）」の開講を企画し、実施計画が承認された。

3. 協定校との教育交流

- ① ブルネイ・ダルサラーム大学との授業交流（別紙資料 2-71：P000）
ブルネイ・ダルサラーム大学で日本語授業を履修している学生と、日本語教育プログラム「日本語教授法Ⅰ」を履修する学生とのオンラインによる学生交流を行った。
- ② カナダ・サイモンフレーザー大学とのオンライン学生交流を企画
サイモンフレーザー大学の日本語授業を履修している学生と、基盤科目の『多文化共生』科目を履修している学生とのオンラインによる学生交流を企画し、平成 29 年後期 1～2 月に実施した。
- ③ ウィスコンシン州立大学スペリオール校との授業交流
ウィスコンシン州立大学スペリオール校で日本語授業を履修している学生と、日本語教育プログラム「日本語教授法Ⅰ」を履修する学生とのオンラインによる学生交流を平成 29 年度 12 月に実施した。



ウィスコンシン大学スペリオール校の学生と、本学の日本語教育プログラム受講学生とのオンライン交流会

【関連イベント報告】

①小中学校・高等学校への留学生の派遣

今年度は、以下の県内各校に留学生を派遣し、地域の中学生・高校生と本学留学生との異文化交流を図った。特に、12月20日の県立水戸高等特別支援学校への事前学習は同校が海外への修学旅行を初めて企画するにあたり、その事前学習として派遣依頼されたもので、新聞等マスコミにも報道された。

- ・9月8日・13日茨城大学教育学部附属中学校（各5名派遣）
- ・10月11日県立桜の牧高等学校（4名派遣）
- ・11月13日龍ヶ崎市立八原小学校（13名派遣）
- ・12月13日県立桜の牧高等学校城北校（7名派遣）
- ・12月20日に水戸高等特別支援学校（2名派遣）

- ・12月21日茨城大学教育学部附属中学校（15名派遣）
- ・1月16・17日県立水戸第一高等学校（2日×16名派遣）
- ・1月24日に県立桜の牧高等学校城北校（7名派遣）
- ・1月26日に茨城大学教育学部附属中学校（10名派遣）、

②留学生・日本人学生協働発表会の実施

平成29年7月25日～28日、本学図書館展示室において「留学生・日本人学生協働発表会」を実施した。発表会では、基盤科目「Studies in Contemporary Japan」及び「Japanese Pop Culture」を履修する留学生・日本人学生が協働で日本の社会問題や文化について発表を行った他、日本語研修コースレベル3（口頭表現）・レベル4（総合）を履修する留学生が発表を行った。発表の他、展示室には協定校との交換留学プログラム、海外研修プログラム、本学で学ぶ留学生の母国・地域などを紹介するパネル約20点を展示し、本学の国際交流について学内外に取り組みを紹介した。



③学生交流促進のためのワークショップ（資料2-73：P000）

平成29年9月21日、阿見キャンパスにおいて、学生交流促進のためのワークショップを行った。ワークショップには、6名の日本人学生が参加した。後学期には参加した学生が中心となり、海外留学派遣予定学生・受入学生の交流を目指したおしゃべり型の日本語学習支援の授業が阿見キャンパスにて開講されている。

④協定校から講師を迎えてのセミナー開催

平成29年度6月7日（水）に協定校である米国アラバマ大学バーミングハム校にて日本語を担当されている高宮優実講師を迎え、全学教育機構グローバル化推進セミナーを開催した。「アメリ

カにおける日本語教育」と題し、日本語教育プログラム受講学生を中心に、現地での実践経験のある講師よりアメリカで日本語を教えるために必要な表現・スキル・手法を学んだ。

⑤ 学生国際会議の開催

平成 29 年 11 月 18・19 日、水戸キャンパスおよび水戸国際交流センターを会場に本学学生による第 13 回茨城学生国際会議が開催された。会議には、2 日間で茨城大学の学生・留学生のほか、県内の高校生を含む 151 名が参加。インドネシアのガジャ・マダ大学研究科長による講演のほか、学生等による学術発表がすべて英語で行われた。また、昨年を引き続き、2 日目の午後に水戸市内エクスカージョンを企画。弘道館ツアーでは、水戸観光コンベンション協会にご協力いただき、市民観光ボランティアによる英語での説明が行われ、高校生・留学生を含む参加者 57 名は弘道館の歴史と文化を楽しんだ。その後、参加者は、水戸市国際交流協会にて、本学学生のボランティアによる書道・茶道・けん玉のブースにて実際に日本文化を体験した。

⑦ 日本語教育プログラム「日本語教授法演習(海外)」

今年度より全学教育機構のプログラムとなった「日本語教育プログラム」の最終科目である「日本語教授法演習(海外)」の実施校にウィスコンシン州立大学、アイダホ州立大学、レンヌ第一大学が加わった。また、同科目は「海外協定校におけるインターンシップ型日本語教師養成プログラム」として日本学生支援機構の海外留学支援制度（協定派遣）短期研修・研究型（タイプ A）に採択され、平成 30 年度には 3 名が派遣される予定である。

[資料：留学生向け日本語教育（単位なし）]

前期

科目名	担当者	開講地区	担当回数	開講回数
日本語レベル 1（総合）	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル 1（総合）	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル 1（総合）	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル 1（総合）	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル 1（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル 1（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル 2（総合）	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル 2（総合）	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル 2（総合）	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル 2（総合）	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル 2（読み書き）	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル 3（総合）	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル 3（総合）	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル 3（総合）	青木香代子	水戸	15	15

日本語レベル3 (総合)	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル3 (口頭表現)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル3 (漢字)	安龍洙	水戸	15	15
日本語レベル4 (総合)	瀬尾匡輝	水戸	15	15
日本語レベル4 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル4 (口頭表現)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル4 (漢字)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル5 (総合)	安龍洙	水戸	15	15
日本語レベル5 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル5 (漢字)	非常勤	水戸	15	15
日本事情	安龍洙	水戸	15	15
日本語入門	瀬尾匡輝	阿見	10	10
初級日本語	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語中級	瀬尾匡輝	阿見	10	10
論文作成	瀬尾匡輝	阿見	10	10
非漢字圏の人のための漢字	瀬尾匡輝	阿見	10	10

後期

科目名	担当者	開講地区	担当回数	開講回数
日本語レベル1 (総合)	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル1 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	八若壽美子	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	青木香代子	水戸	15	15
日本語レベル3 (総合)	池田庸子	水戸	15	15
日本語レベル3 (漢字)	安龍洙	水戸	15	15
日本語レベル4 (総合)	瀬尾匡輝	水戸	15	15
日本語レベル4 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル4 (口頭表現)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル4 (漢字)	非常勤	水戸	15	15
日本語レベル5 (総合)	安龍洙	水戸	15	15
日本語レベル5 (総合)	非常勤	水戸	15	15
日本事情	安龍洙	水戸	15	15

② 部門の活動 [特色ある業務]

日本研究	安龍洙	水戸	15	15
多読で学ぶ日本語	池田庸子	水戸	15	15
日本語入門	瀬尾匡輝	阿見	10	10
初級日本語 II	瀬尾匡輝	阿見	10	10
アカデミック・ジャパニーズ	瀬尾匡輝	阿見	10	10
日本語会話	瀬尾匡輝	阿見	10	10